

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 25 日現在

機関番号：25502

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530770

研究課題名(和文) 障害のある人々の参加(参加制約)とエンパワメント評価の研究

研究課題名(英文) A Study on the Participation (Participation Restrictions) of People with Disabilities and Empowerment Evaluation

研究代表者

野村 公香(増田公香)(Nomura(Masuda), Kimika)

山口県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：60316776

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：第一に、ICFの参加(参加制約)に関し客観的側面に留まらず主観的側面も視点に入れた評価スケールであるQCIQ及びPOPSの日本語版QCIQ及び日本語版POPSを作成した。そのうえで日本語版QCIQ及び日本語版POPSをもちいて、リハビリテーション機関を利用している人びと及び地域に在住している身体障害のある人々に対し参加(参加制約)の実態把握を行った。

第二にフィンランド語版QCIQを作成し、フィンランドにおいて障害のある人びとに対し参加(参加制約)の実態把握を行った。第三にフィンランドにおける障害福祉関連機関にてインタビュー調査を行い支援の実態及び近年の動向を把握した。

研究成果の概要(英文)：The study was conducted in three phases. In the first phase, the QCIQ(Quality of Community Integration Questionnaire)and POPS(Participation Objective, Participation Subjective) that measure the level of participation (participation restriction)in terms of ICF were translated into Japanese to research the level of participation (participation restriction)of people with disabilities in Japan. In the second phase, the Finish version of the QCIQ that measure the level of the participation (participation restriction)in terms of ICF were developed to conduct research in the level of participation (participation restriction) of people with disabilities in Finland. Finally, interviews were conducted with professionals working at the agency of social work and social services for people with disabilities of Finland to obtain the information regarding social welfare policy and services for people with disabilities in Finland.

研究分野：障害者福祉

キーワード：エンパワメント評価 参加(参加制約) 日本語版QCIQ 日本語版POPS フィンランド語版QCIQ フィンランドにおける障害のある人びと

1. 研究開始当初の背景

(1)障害のある人々に対するエンパワメントが強化される中、海外においてエンパワメント評価という概念が出てきた。研究開始当初は、Fetterman D.M.により『Empowerment Evaluation- Knowledge and Tools for Self-Assessment & Accountability』(Sage Publication ,1996)が出版されていた。

(2)WHO は 2001 年新たな障害概念として ICF(国際生活機能分類)を発表し、そこでは ICIDH の社会的不利が参加(参加制約)へと変化した。また 1990 年代に海外において CIQ(Community Integration Questionnaire)という評価スケールが開発された。筆者は、日本語版 CIQ を作成し(増田公香・多々良紀夫『CIQ 日本語版ガイドブック』2006)普及した。その後参加(参加制約)に対し客観的側面に加え主観的側面への評価も加えた QCIQ(Quality of Community Integration Questionnaire, Cieron et.al.,2004) や POPS(Participation Objective, Participation Subjective, Brown et.al.2004)が開発されてきた。

2. 研究の目的

(1) ICF の参加(参加制約)の新たなる評価スケールである QCIQ(Quality of Community Integration Questionnaire, Cieron et.al.,2004, 以下「QCIQ」)と POPS(Participation Objective, Participation Subjective, Brown et.al.2004 以下「POPS」)の日本語版を作成し、そのうえで実際に日本において障害のある人々に対する参加(参加制約)に関する実態把握を行う。

(2)QCIQ(Quality of Community Integration Questionnaire, Cieron et.al.,2004) と POPS(Participation Objective, Participation Subjective, Brown et.al.2004)のフィンランド語版を作成し、実際にフィンランドにおいて実態把握を行う。

(3)Fetterman D.M.により『Empowerment Evaluation- Knowledge and Tools for Self-Assessment & Accountability』(Sage Publication ,1996)の翻訳を行い、日本社会においてエンパワメント評価の概念定着を図る。

3. 研究の方法

(1)日本語版 QCIQ と日本語版 POPS を作成するにあたり、英語に熟知した研究者に日本語版を作成してもらった。さらに日本にて研究を行っている英語を母国語とする研究者にバックトランスレーションをしてもらい、そのうえで日本語版 QCIQ と日本語版 POPS を作成する。

(2)作成した日本語版 QCIQ と日本語版 POPS を用いて実際に障害のある人々に対してプ

レテストを行う。

(3)フィンランド語版 QCIQ と日本語版 POPS を作成するにあたり、英語に熟知した研究者にフィンランド語版を作成してもらった。さらにフィンランドにて研究を行っているフィンランド語と英語を母国語とする研究者にバックトランスレーションをしてもらい、そのうえでフィンランド語版 QCIQ とフィンランド語版 POPS を作成する。

(4)フィンランド語版 QCIQ とフィンランド語版 POPS を用い、実際にフィンランドに在住する障害のある人々に対して実態把握を行う。

(5)出版社をととして Fetterman D.M. により『Empowerment Evaluation- Knowledge and Tools for Self-Assessment & Accountability』(Sage Publication ,1996)の著作権について確認を取り、そのうえで社会福祉の研究者グループにて翻訳を行う。

4. 研究成果

(1)日本語版 QCIQ と日本語版 POPS の作成
2012 年度には、まず QCIQ と POPS の開発者 Cieron と Brown に日本語版及びフィンランド語版作成の承諾を得た。そのうえで、日本語版作成に向けて着手した。具体的には、英語に堪能な日本人 2 名により日本語への翻訳を行った。その後日本語に堪能な英語のネイティブスピーカーに研究者に依頼しバックトランスレーションを行った。そのうえで、日本語版 QCIQ と日本語版 POPS の作成をおこなった。

(2)日本語版 QCIQ と日本語版 POPS のプレテストの実施

2013 年度には、身体障害のある方々数名に対し日本語版 QCIQ と日本語版 POPS のプレテストを実施した。そのうえで表現等を一部改訂し再度日本語版 QCIQ と日本語版 POPS の作成を行った。

そのうえで 2014 年度に再度プレテストを行った。具体的には、身体障害のある当事者 25 名・精神障害のある当事者 30 名・障害のない健常者 50 名に対して実施した。結果は、身体障害のある当事者 17 名(有効回答率 68%)・精神障害のある当事者 12 名(有効回答率 40%)・障害のない健常者 36 名(有効回答率 72%)から有効回答を得、最終版の日本語版 QCIQ と日本語版 POPS を作成した。

(3)日本語版 QCIQ と日本語版 POPS を用いた実態把握

2014 年度において、研究協力者である奈良進弘教授(東京工科大学)・新川久子准教授(国際医療福祉大学)により 2 か所のリハビリテーション機関において作成した日本語

版 QCIQ と日本語版 POPS を用いて実態把握を行った。具体的には、A 機関においては 80 名に配布し 38 名（有効回答率 47.5%）から有効回答が得られた。結果は、男性 17 名・女性 21 名で平均年齢は、65.7 歳（±15.8）だった。B 機関においては、13 名に対し面接法より 2 回に分け実施した（有効回答率 100%）。結果は、男性 1 名・女性 12 名、平均年齢 78 歳（±10.7）で、対象者が高齢であったため POPS の生活分野項目及び退陣・人間関係項目が低く社会参加が低いこと、人間関係が希薄であることが顕著であった。

(4) 日本語版 QCIQ を用いた実態把握

2015 年度においては、A 県において身体障害のある人びと 1,000 名に対して日本語版 QCIQ を用いて参加（参加制約）の実態把握を行った。日本語版 POPS に関しては、質問内容にセックスの項目がありプレテスト及び日本語版 QCIQ と日本語版 POPS を用いた実態把握において無回答が多かった。そのため、等調査においては日本語版 QCIQ のみを用いた。結果は、259 名から有効回答が得られた（有効回答率 25.9%）、男性 137 名（52.9%）・女性 121 名（46.7%）・無回答 1 名（0.4%）だった。平均年齢は 61.9（±16.6）歳だった。参加（参加制約）の状況のうち家庭統合に関しては女性の方が高かった。

(5) フィンランドにおけるエンパワメント評価の実際

2012 年度にフィンランドに訪問し、障害のある当事者がグループリーダーとなり相互にグループのプログラムを評価し支援しているエンパワメント評価の実際を視察した。具体的には、リーダーとなる当事者は自分が好きなことあるいは得意なことを中心にプログラムを展開する。そのうえでメンバーは、好きなプログラムのところを選択してグループプログラムに参加する。そのうえで参加したメンバーがグループのプログラムあるいはリーダーに対して図式等をもちいて評価を行う、というものだった。当事者が主体となりエンパワメント評価を展開しているプログラムで今後日本における応用も可能であると考えた。

(6) フィンランド語版 QCIQ の作成

フィンランドに長年在住の社会福祉研究者の協力を得てフィンランド語版 QCIQ を作成した。また英語及び日本語に秀でているフィンランド在住の研究者の協力を得てバックトランスレーションを行い、最終フィンランド語版 QCIQ を作成した。

(7) フィンランド語版 QCIQ を用いた実態把握

フィンランド語版 QCIQ をもちいてフィンランドに在住の障害のある当事者 77 名に対して実態把握を行った。具体的には、知的障

害のある人びと 46 名・精神障害のある人びと 31 名から有効回答が得られた。結果は、知的障害のある人々に関しては、男性 21 名（45.7%）・女性 25 名（54.3%）で既婚者 1 名・未婚者 44 名・その他 1 名だった。精神障害のある人々に関しては、男性 18 名（58.1%）・女性 13 名（41.9%）で、既婚者 1 名・未婚者 29 名・その他 1 名だった。フィンランドにおける対象者の多くはグループホームあるいは地域で家族とともに生活していたため QCIQ の家庭統合の項目は低かった。

(8) フィンランドにおいて障害のある当事者へのエンパワメントに関するインタビュー調査

グループホーム及び地域で生活している知的障害のある人びと及び精神障害のある人々 7 名に対してエンパワメントに関するインタビュー調査を行った。その結果、対象者は地域やグループホームで生活しており、就労や芸術活動をとし自らの生活をマネジメント及びエンパワメントを展開し QOL の高い生活を営んでいることが確認できた。

(9) 『Empowerment Evaluation- Knowledge and Tools for Self-Assessment & Accountability』の翻訳化

『Empowerment Evaluation- Knowledge and Tools for Self-Assessment & Accountability』の翻訳に関しては、2012 年度に出版社をとし翻訳の運びとなった。その後アメリカの出版社に出版社を通し承諾を得る運びとなった。その後具体的に翻訳を展開していたが、2013 年度半ば時点で、『Empowerment Evaluation- Knowledge and Tools for Self-Assessment & Accountability』の第 2 版が 2014 年 9 月以降に出されることが判明した。メンバー間で検討した結果、第 2 版を翻訳することとなりプロジェクトの中断及び延期を行った。その後出版社が第 2 版の翻訳の許諾を得、2015 年度より第 2 版の翻訳が展開された。具体的には用語の統一化を図るためインデックスの作成及びほぼ翻訳の原稿は整ったが一部分担者の遅れが生じ現時点では翻訳の完成と至っていない。

(10) フィンランドにおける障害者福祉の実態把握

2015 年度にはフィンランドを視察し、障害者福祉の機関の支援者にインタビュー調査をおこなった。具体的には、シボ市の障害者福祉担当のソーシャルワーカー、ポルボー市の精神障害のある人びとに対するグループホーム、ラファティ市にある知的障害のある人々に対する支援施設、さらにはフィンランド知的障害者協会の研究部長に対してインタビュー調査を行いフィンランドの障害者福祉の実際及び

動向を把握することができた。

(11) 総括

本研究結果に関しては大きく以下の4点にまとめることができる。

第一に、日本語版 QCIQ 及び日本語版 POPS を用いた参加(参加制約)に関する研究である。ICF の参加(参加制約)の客観的及び主観的側面も加えた評価スケールとして海外で開発された QCIQ と POPS の日本語版を作成し、プレテストを実施したうえで参加(参加制約)の実態把握を行った。ただし POPS に関してはセックスの項目があるためインタビュー調査では回答が得られたもののアンケート調査では無回答が多いという結果になった。

第二に、フィンランド語版 QCIQ を作成しそのうえでフィンランド語版 QCIQ を用いて地域在住の知的障害や精神障害のある方々へのアンケート調査を行い参加(参加制約)の実態把握を行った。

また、地域在住の知的障害や精神障害のある方々7名に対してインタビュー調査を行うことができ当事者の視点から質的にエンパワメント及び参加(参加制約)に関して把握することができた。

第三に、フィンランドにおける障害者福祉関連機関に視察に行き、ソーシャルワーカー・研究者・支援者に長時間にわたりインタビューすることができた。フィンランドの障害者福祉施策・サービス・研究状況・支援者の労働環境の相違等を多角的視点から把握することができた。また障害のある当事者が主体となり展開されているエンパワメント評価プログラムの実際を視察することができ今後日本に向けての可能性を検討することができた。

第四に、『Empowerment Evaluation-Knowledge and Tools for Self-Assessment & Accountability』の第2版の日本語版作成に当たりインデックスを作成することができた。これは単なる翻訳にとどまらずエンパワメント評価の概念が意図することをメンバー間で深く議論し作成し、大変意義深いものだと考える。残念ながら現時点では時間的制約から翻訳の完成には至っていないが、日本の今後ソーシャルワークに新たな方向性を提示することが可能であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

増田公香・蜂須賀研二、「ICF と社会参加」『Medical Rehabilitation』No.152, 2012, 15 - 19.

増田公香、「障害者の社会参加に関する評価」『リハビリテーション医学』Vol.50., No.1, 2013, 16-20.

増田公香、「障害者権利条約の実効状況の評価と論点～26 か国はの総括所見から～差別禁止(第5条)」『リハビリテーション』第165巻, 2015, 8 - 12.

〔学会発表〕(計 6 件)

増田公香、「社会参加の評価」『第49回リハビリテーション医学会学術集会(招待講演)』2012年5月31日, 福岡国際会議場・福岡サンパレス, 福岡

Kimika Masuda, Toshio Tataru, “Analysis of Abuse and Care Workers’ Satisfaction and their workplaces: A Nationwide Study in Japan”, Gerontological Society of America, Nov.2012, SanDiego Convention Center, SanDiego, U.S.A.

Kimika Masuda, “Participation of People with Disabilities who are getting older in Japan”, The IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, June 2013, Seoul, Korea.

増田公香、「障害のある人々に対する権利侵害と支援者の労働環境との関連性～支援者の視点から見た実態把握～」, 第61回日本社会福祉学会, 2013年9月, 札幌, 北星学園大学, 北海道

増田公香、「障害のある人々と権利侵害～実態調査の結果をもとに～」, 第45回日本社会福祉学会中国・四国地域ブロック徳島大会(招待講演), 2013年7月, ふれあい会館, 徳島

増田公香、「フィンランドにおける知的障害のある人々のエンパワメントプログラムをもとに」第62回日本社会福祉学会全国大会, 2014年11月, 早稲田大学, 東京

〔図書〕(計 2 件)

荒田寛・佐々木敏明・今井博康・増田公香, 『障害者に対する支援と障害者自立支援制度』, へるす出版, 2012, 269.

増田公香, 『当事者と家族からみた障害者虐待の実態～数量的調査が明かす課題と方策～』明石書店, 2014, 242, 東京

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

増田公香 (MASUDA, Kimika)
山口県立大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：60316776

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

奈良進弘 (NARA, Nobuhiro)
東京工科大学・医療保健学部・教授
研究者番号：10143926

新川寿子 (SHINKAWA, Hisako)
国際医療福祉大学・福岡保健医療学部・准
教授
研究者番号：40235768

(4) 研究協力者

Herrera C. Lourdes R.
日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・
准教授
研究者番号：40597720

力武由美 (RIKITAKE, Yumi)
日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・
准教授
研究者番号：70514082